

## SANOメモリアルフェスタ開催 「さのまる」が2歳になりました!

2月24日、佐野らーめん会設立25周年と、佐野ブランドキャラクター「さのまる」の2歳の誕生日をお祝いするイベント「SANOメモリアルフェスタ」が市役所建設予定地で開催され、市内外から約3万人の方が来場しました。



会場には佐野らーめん会加盟の6店のほか、いもフライや耳うどんが出品されました。また、さのまる応援隊加盟店を中心に約50のブースも設けられ、来場者は、思い思いに佐野の味覚を楽しみました。

さのまるの誕生会には、岐阜市柳ヶ瀬商店街の非公式キャラクター「やなな」や栃木県マスコットキャラクター「とちまるくん」など全国各地23のキャラクターや、佐野ブランド大使・ダイヤモンド☆コカイさんが駆けつけ、会場の皆さんとともにさのまるの2歳の誕生日を祝福。さのまるにはこの日、多くのメッセージや331個ものプレゼントが届けられました。

## Town Topics まちの話題



多くのお祝いのメッセージ・プレゼントをお寄せいただき、ありがとうございました。

## 町内広報誌でコミュニケーションを!



作成・編集を手掛ける桑原さん

皆さんの町内の情報交換は、どのように行われていますか?

今回ご紹介する犬伏新町は、町会広報誌「犬伏新町便り」を毎月1回発行して、町内で開催された行事や最新ニュースなど多彩な話題を町民の皆さんに情報発信しています。

町会長の矢島堅司さんの呼びかけで、平成21年5月に始め現在まで60号発行。「犬伏新町便り」作成のほか編集も手掛ける副会長の桑原太平さんは「町内の出来事を皆さんに発信し町会に関心を持ってもらいコミュニケーションを深めたい。これからも町内の皆さんと接しながら、100号記念号を発行できるように情報提供を続けたい」と熱い気持ちを語ってくださいました。

(市民記者 飯田瞬)

## 芸能でつづる田中正造

3月16日、文化会館で、「芸能でつづる田中正造」が開催されました。

この催しは、「田中正造没後100年記念事業を進める会」と佐野市・佐野市教育委員会の共催で行われました。郷土の偉人である田中正造の功績を、劇や民話、八木節、踊りや詩吟などを通し、広く・永く伝えようと、市内外から7つの団体が参加・発表をしました。

会場には、300人を超え、立ち見が出るほどの観客が訪れ、各団体の発表が終わるごとに、盛大な拍手が響き渡りました。

市では今年、没後百年を迎える正造の顕彰事業をさまざまなかたちで進めています。ぜひご参加ください。



注目  
健康福祉  
募集  
催し物  
お知らせ  
講座  
話題

## ブルーリボンに祈りを込めて



佐野法人会が毎年開催する講演会は話題性の高い講師のお話が聞けることで人気となっています。

2月16日の講演会では、北朝鮮による拉致被害者・横田めぐみさんの父・滋さんと母・早紀江さんが佐野を訪れ、ご夫妻のお話を聞こうと約600人が来場し、安全のため整理券を配布し、制限したほどだったそうです。

1977年にめぐみさんが失踪し36年が経過。ほかの被害者のご家族もみな高齢化しており、「生きている間に逢いたい」というご家族の訴えは切実で、満場の聴衆はご夫妻のお話に耳を澄ませて聞き入っていました。

また講演の中では、北朝鮮による拉致の可能性を排除できない「特定失踪者」に指定されている安西正博さんの父・安西茂雄さん(小山市)が紹介され、佐野にいても拉致が身近な問題であることを知りました。

私たちにできることは多くはありませんが、とぎれぬ世論が救済への道をつなぎとめていることを忘れてはならないとブルーリボンを身につけて感じました。(市民記者 永倉文子)

## 106年の伝統をバトンタッチ 佐野女子高から、佐野東高校へ



優しい春を感じた3月1日、佐野女子高校(佐女高)の名称での、最後の卒業式が行われました。

父母の皆様や先生方、そして大勢の来賓の方々が見守る中、女子高として入学した最後の卒業生198名に卒業証書が授与されました。

在校生代表・出口達巳君の「106年の歴史を受け継ぎ、佐野東高校生として、まい進いたします」との送辞を受け、卒業生代表・塚田小夏さんは「最後の佐女高生と言われ、辛いこともありましたが、先生方に大切にいただき、感謝しています。106年の伝統を佐野東高へバトンタッチします。ありがとうございました」と106年分の思いを込めて、答辞を述べました。

明治40年に創立し、27,000人を超える同窓生(八千代会)を持つ佐女高。品性、優しさ、思いやりを大切にする校風は、佐野東高へと受けつがれ、輝き続けることでしょう。

(市民記者 吉井貴子)

佐野  
ばんたい

あきらめて心を入れ替えるこ  
とをドシヨズクとウンジョー  
スルという

あることをかたくなに守ろうとしていたにも関わらず、やむを得ずあきらめて受け入れることを、ドシヨズクといいます。

「屁理屈(へりくつ)ベー(ばかり)言っつて、みんなにヘラツイテ(さからつて)いたあの男も、とうとうドシヨズイタとみえて今ジャー(では)黙り込んでルツケヨ(いるよ)」

ドシヨズクは、「土性骨(どしやうぼね)が尽く」が変化して生まれた方言です。困難にもくじけない強い根性をもっていたのに、それが次第に尽き果ててしまったということから、「あきらめる」の意に転じてしまったというわけです。

あきらめると同じ意の古い共通語に「うんじょう」があります。これまでの体験から高望みすることをあきらめて、心を入れ替えることをウンジョースルといいます。「ウンジョーシタ人」といえば、苦勞して何でもわきまえている人をいいます。

今から50年、60年前には「あの娘は、セツネー(貧乏な)家に生まれ育ったんだってガネ。ああいう娘はウンジョーシテツ(苦勞している)から、嫁にもらつたうちはヨカンベ(いいでしょう)よね」という話が聞かれたものです。ウンジョースルを使っていたのは昭和20年頃までで、今では一部の高齢者に限られています。もはや死語に近い語といってもいいでしょう。

(市民記者 森下喜一)